

## 第7回高等学校改革プラン推進委員会（第二推進委員会）議事録

1 日時 平成17年9月7日（水）午前9時00分～午後0時00分

2 場所 上田市情報ライブラリー 5階会議室

3 出席委員

飯島 俊勝委員長	荻原 拓次委員
佐藤 元太郎副委員長	宮阪 義彦委員
芹澤 勤委員	滝澤 清登委員
遠山 順孝委員	中沢 裕委員
小林 将喜委員	西村 廣一委員
太田 節委員	市川 久由委員
和泉 碩也委員	原 貞次郎委員

4 開会

（植松主任教育支援主事）

お暑い中をお集まりいただきましてありがとうございます。それでは委員長よろしくお願いたします。

（飯島委員長）

おはようございます。

それではただいまから、第7回的高等学校改革プラン推進委員会を始めさせていただきます。まず初めに今日は資料がいくつか出ております。始めは前回こちらの方から事務局の方へ要望した資料であります。たたき台であります。教育委員会の方で高校再編にあたっての解説といいますか、その内容についてデータのものはないと事務局へ要望したもので、その他には各委員会から要望があった資料であります。それらについて事務局の方から説明をしていただきます。どうぞお願いいたします。

5 資料説明

高校教育課植松主任教育支援主事から、資料・他地区推進委員会審議状況について説明  
【説明内容省略】

6 議事

（飯島委員長）

ありがとうございました。たたき台であります。大変委員会の報告には影響のある資料提供であります。今回は資料提供の内容について十分討議をおこなっていただきたいとします。質問、ご意見等を申し受けます。どうぞお願いいたします。

(荻原委員)

たたき台の補強ということで、出てきたと思いますが、まず前提として質問をお願いしたいのですが、第二通学区となっておりますが、実質的には第5区と第6区とを分けて考えていらっしゃると思います。

流出入その他の分析につきましても、高校のクラスにつきましても、そういう前提で総合学科や多部制も考えていることなので、そういう意味では、候補案と前提となる中卒者あるいは高校のクラス数に関連しては、どうも矛盾があるのではないかと私は思っております。

もうひとつ中学卒業生とクラスの編成が消えることに対しまして、私立高校について、特に佐久市には佐久長聖高校という高校がございますが、そこで160,170人くらい行っているわけですが、紳士協定で18%ということで今後も守られていくのか、もう少し私立としても、中卒者も減れば募集定員は減るのか上げるのか、その辺の目論みもあろうかと思えます。

そういう意味では、第5区が減っても高校数が少ないので大丈夫だというような格好で、もとのたつよりどころが、どうも第5区と第6区と分けて考えているのに、高校としては第二通学区で、多部制それから総合学科を考えているということは、最初の立脚点がおかしいのではないかと、それを前提としてお答えいただきたいと思っております。

(飯島委員長)

事務局よろしいでしょうか。お願いします。

(柳澤教育主幹)

この再編整備を考えるにあたりまして基本的には、今お話がございましたように、四つの通学区単位というエリアで考える。これを基本に、据えまして更に旧通学区、今は区と申しておりますが、12区ごとの考える視点と両方見ながら候補案を考えているということでございます。

例えば総合学科、多部制・単位制につきましては、それぞれ四つの通学区に1校配置ということでございますので、それぞれの四つのエリアで、考えていただかなければならないかと思っております。また募集定員の決定にあたりましては、旧区通学区単位で、中学卒業者の動向や近隣の通学区との流出入等を考慮して、決定をしております。

また公私の問題につきましては、今お話がありましたように、概ね82対18ということになっておりまして、これは毎年公私協議会というところで、協議をしまして決定していくとになっております。

ここ数年続いております、おおよそ82対18という数字を考慮しまして募集予想学級数というものをシミュレーションしておりますので、生徒が減ってまいりますと、同じ割合で公立、私立の方も生徒数は、減っていくというシミュレーションになっているわけでございます。

(荻原委員)

私立のことを考えると、一緒にシミュレーションして減らしていくと、正直経営が成り立っていくのかということも考えるわけですが、そういう意味では、もう少し前提としては、大変相当基礎が悪いのではないかという気がしております。

県の方針として、この第二通学区については、1校ずつというのが前提でこれはとてもおかしくはないということをいいながら、ここでふたつ以上というもあるからというお話も聞きますが、具体的に候補案の説明に乗るには、私はまだ躊躇するわけです。議論の前提として、やはり5,6に分けて考えてらっしゃるのに、それぞれ「高校は1校ずつしかつくりませんよ」というのは、私としてはどうも納得がいかないことを、申し述べておきたいと思います。

(原 委員)

それではお願いします。今指摘された私立問題については、前回、前々回指摘いただいておりますので、同じ様な問題意識をもっているということですね。特に今年度佐久長聖の場合には、募集定員プラス1学級増やして入れています。そういう問題をどう考えるかということも、付け加えておきます。

さて本日出された資料で、いくつか目に付くところを、まず質問させていただきます。第1は、望月・蓼科の統合であります。2ページにありますが、これは以下その地理的状況、交通利便性の問題にかかわることが、大変気になっており、このことについてです。

例えば2ページの地理的状況で、望月高校と蓼科高校の距離は6.7km程度である。これは学校間の距離でしかないわけです。ご承知だとは思いますが、望月の場合には、学校は北側に位置しておりまして、その背後南側に、春日の谷や協和の谷があるわけです。この望月の町中から望月高校に、出てくるまでには大変な距離がある。そうしたことを、どのようにお考えなのか。

「バスで通学できる」という記述がありますが、そのバスが利便性といえるほどの利便さをもっているか、ということも疑問のところであります。更に触れたいことがあります。後にまわします。

ふたつめは、野沢南の多部制・単位制の問題であります。ここで説明されているのは、入学者の状況は、募集定員を満たしているという記述があり、4ページの地理的状況のところでは、「佐久の中心地で小諸、北佐久、南佐久地域の広域から通学が可能である」と、以下そこに似たような記述があるのですが、これも前に1回申し上げたことがあります。例えば北佐久のそれこそ望月、蓼科方面からあるいは軽井沢方面から通学が、可能だとお考えなのでしょうか。

それから野沢南に関わって、もう一点は先程も申し上げましたが、募集定員を満たしているとの記載があります。つまり大きく欠員を招じて学校の活性化とか、そういうところで問題が顕在化しているということは無いように思うのです。にもかかわらず、その突然多部制・単位制への転換と候補案に記載されましたが、一体これは何なのか。なぜ野沢南が、しかも先程いいましたように広域通学が、本当に可能かという疑問を持ちます。なぜ野沢南の多部制・単位制の転換なのか、「なにがなんでも第二通学区に1校多部制・単位制をつくれ」と、そういう外から持ってこられた結論ではないか、そういう感じがする

わけです。

次に丸子の総合学科についてでございますが、これも同じことであります。地理的状况で、「大屋から路線バスを利用して 15 分程度である。」バスを利用して 15 分なわけです。自転車で、大屋から現地まで通っている生徒、その他もあると思いますが、これも前の委員会で、事務局からお話がありましたが、かつて丸子が総合学科うんぬんを議論したときに、隘路になったのは利便性だったわけです。それがひとつの理由で、実現しなかったのです。ところが今度は、やはり利便性があるといっているのです。矛盾ではないでしょうか。

もう一点、定時制の再編候補案ですが、ここでは総括のところの問題を申し述べて質問をしたいのですが、7 ページであります。総括の「定時制に通う生徒が多様化しており、夜間部でなければ通えない生徒は減少傾向にある。」これはどこからこの記述が出て来たのでしょうか、こういう記述は私は初めてお目にかかります。

なるほど多様化していて昼間定時制、つまり多部制などを必要とする子ども、生徒もいるでしょうが、夜間部でなければ通えない生徒は減少、これはそうではないと言うことを前に数字の上で、つまり平成 2 年のピーク時に、匹敵するそれ以上の生徒が、今日定時制に来ているということです。数字の上で申し上げたことがあるわけです。

それからこれも新しい記述のように思うのですが、その総括の下段の方に第二通学区に、設置される多部制・単位制の野沢南高校を選択肢のひとつとしていくことが、可能であると、つまり上田地区の定時制が無くされて、これは基本的には坂城高校へ行くということになります。もうひとつの選択肢として、野沢南もあるというのですが、これも交通の事情が、上田から小諸に出て、小諸から乗り換える。これも可能だという、要するに現実性があるというのです。理論上ではないです、現実的に多くの生徒にとってそういうことが出来るかという、そういうことであるのならば、そういうふうには思えないのですがいかがでしょうか。以上何点かお願いします。

(篠原教育幹)

それではお願いいたします。今お聞きのご質問、ひとつは非常に大きな部分は、交通の利便性という点であろうかと思います。交通の利便性ということを考えていきますと、これはさまざまな種類、普通科、総合学科、多部制・単位制のさまざまな高校が、さまざまな地域に立地しているということが、長野県の現状でございます。

さらに前提となるのは、最終報告で私どもがお願いしたように、今委員さんの方からも話がありましたように、各地区多部制 1 校、総合学科 1 校、これを配置するという大前提の基本計画これがございます。今後例えば、10 年先であるとか 20 年先であるとかいう中で、私どもが、考えていくということももちろんあるわけですが、しかし現状の中で何が最善かと考えたときに、ひとつは多部制・単位制、ひとつは総合学科、これを各地区 1 校配置するという基本的計画、これをお示ししてそれが、どこに立地するのがいいかということで皆様方に、ご議論をお願いしているということでございます。

それから通学の、利便性ということをいいますと、長野県内これはさまざまな学校の中でそれぞれの利便性というものを、追求していかなければいけないという立地に、どの高等学校も一部都市部を除きまして、どこの学校もそういう点は、考慮していかなければ

いけないことがある、これは現実でございます。

ただ大前提の、再編整備さらに多部制・単位制そして総合学科ということ、考えていきますと、なんとか通学の利便性を追及していかなければいけない。これはやはり地元が一番近い所に、学校があってということではなくて、再三お願いしている通り、ある程度高等学校のスケールメリットというものを、私どもが追求していく中で、ひとつの学校の再編整備というものを、考えていかなければいけないと考えております。

スケールメリットということで、考えていきますと当然のことながら、通学の距離、通学の時間というものには、生徒個々その生活条件によっていろんな生徒たちが出てくことは、ある程度はやむを得ないことだと思っております。そういう距離、通学時間というものに、どれだけ他の部分で対応できるかというところをむしろ探っていくということの方が、いわゆる高校改革プランにとっては、メリットがあるだろうと思っております。

それからもうひとつ丸子実業高校の話が出ました。確かに全県1校という平成12年より前の検討段階では当然比較の問題になります。比較の問題の中で現在の塩尻志学館高校、この立地している特に鉄道の条件、こういったものと丸子実業高校というものが、当然比較になりました。比較になる中でやはり塩尻志学館高校1校ということであれば、地理的な条件ということでは、やはり勝るのではないかという判断の中で塩尻志学館高校が、総合学科になってきたということは、これは確かなことでございます。

では各地区に、1校、全県4校つくろうというときに、第二通学区でどこが適切か、先程荻原委員さんの方からもありましたが、5区と6区を分けているのではないかと、これは分ける、分けないということではなくて、各地区に1校以上とりあえず1校ということ考えていった時に、丸子実業高校の持っている現在のさまざまな学科の力ということが、やはり最適だろうということで、今、先程説明がありましたように、丸子実業高校ということで選択をしていくということで、結論になったということでございます。以上でございます。

(中沢委員)

交通の利便性で、今いくつか原委員さんが言っていましたが、私も長いこと生まれてから佐久に住んでいて、同じ様なことは感じます。同じことは繰り返しませんけれども、必ずしも野沢南高校が果たして広い範囲から見て、交通の利便性が良いのかということは疑問に思う点は、交通事情から考えて同じように思います。

それから丸子実業も、今のお話では現在の学科から総合学科に移していくには、都合がいいとそういうことが背景にすごく感じられます。交通の利便性から見たら、これは決していいとは私は思いません。佐久からみたらとても不便です。ということを率直に感じます。それがひとつ。

それからもっと基本的な考え方として、高校改革プランで最終報告の中に学級数において、1学年6学級というのが標準目標値がはっきり出されていて、下限規模として、1学年2学級で2学級を下回ることはないようにしていくべきだと、はっきり書かれております。

そういうことから考えたときに、最初の通学区全体の所にある、「5区では1学年平均6学級程度になるから、現在の学校維持していくことが適切である」とあり、かたや6区のほうでは、「31年度には平均3.73と小規模化するために、学校数を9校程度にする」とい

うこういう議論です。確かに標準目標値は「6」という設定があるのですが、「2」までは地理的な条件、いろんな交通の、まさに利便性とかいろいろ地域の要望とかにおいて、2 学級までは検討委員会の最終報告書でも認めているわけです。

佐久地区は、非常に上小地区と比べて前から言っているとおり範囲が、広いのです。川上の奥からはじまって蓼科、望月、それから小諸、軽井沢の方までそれを平均ならしてまさに6 という学級数にすることは、かなり現実的に厳しい。当然上小地区と比べて、学級数において差が出て当然だと私は思うのです。学校数においても現在、上小地区より多くあるわけですが、それは当然だと思います。それを減らすことによって、より6 学級に近づけるというところに、何か地理的なものを考えたときには無理があると思います。従って私は、この佐久地区の6 区のほうを3.73 となるのも、ある意味ではやむを得ないかなと思っている段階です。その点はどのように考えたらいいのか、また皆さんの考えもお聞きしたり、県教委のお考えもお聞きしたいと思います。

（飯島委員長）

ありがとうございます。山合いの望月高校と蓼科高校の合併の議題であります。他の地域の学校は減らしていないということも含めながら、事務局のほうで中沢委員に対するご返答をお願いします。

（柳澤教育主幹）

はい、標準目標値の1 学年6 学級といいますが、最終報告書にも書いてございますが、全ての学校を6 学級にするとか、そういうことではございません。以前にもお話ししたことがあるかもしれませんが、他県の例で言いますと、大体今再編を進めております所は、「適正規模」というものを設定しまして、「4 ないし8 学級」という範囲で適正規模を設定しておりますのは、大体6 割程度の都道府県になっているかと思います。また「6 ないし8 学級」を適正規模、あるいは「6 学級を標準とする」とか、そういった所があと残りというようなことで、おおむねこのような「適正規模」というものを定めている県が多くございます。

そういった県におきましては、「適正規模」から外れる学校、例えば4~8 という適正規模を設けますと、4 を下回っている学校については当然のことながら再編対象校と、こういう形で計画が進んでいるということでございますが、長野県の場合は大変特異な地理的状况と言いますか、そういうことを配慮しまして、適正規模という考え方は検討委員会の中でもとってこなかったという経緯がございます。従って、この最終報告書にございますように、長野県の場合は、地理的あるいは地勢的な状況を十分配慮すること、そしてまた規模の面での多様化を生かすというようなことが記述されています。

先ほどの下限規模としての1 学年2 学級でございますが、このことについてもこのように述べられております。「交通の利便性や立地条件等、特別な事情のある学校の場合にも、充実した青少年教育の保障という観点から様々な方向を工夫して、下限規模として1 学年2 学級を下回ることのないようにしていく」と、こういう表記がされているわけでありませう。そういったいろいろ特別な事情がある場合でも、2 学級を下回らないようにということになっております。全てを6 にするとか、あるいは2 の学校がたくさんあってもいいと

か、そういうことが述べられているわけではございません。

先ほどの第5区の方ですが、第5区の方は現在6校の県立高校がございしますが、いわゆる生徒急増期に新設校を設けずに、1学年の学級規模を拡大をしながら、経過をしてきたということもございまして、現在5区が1番高い学級規模になっているわけでございます。

このままの減少傾向で推移いくとしますと、先ほどの資料にもございましたように、6に近づいていくという状況でございます。また、第6区の方につきましては、全部で県立高校11校ございまして、このままの推移でいきますと、先ほどありましたように3.73というようなことになってきますが、例えば平均3程度になってくるということは、半分くらいの学校が2学級になっていくということでございますので、そういうことからしますと、現状のままでは、かなり教育の質的な低下というのが起こるのではないかとということで、再編の計画が必要だという判断をしているところでございます。

（飯島委員長）

ありがとうございます。ご意見他にありますか。

（太田委員）

まず第一点ですが、大学への進学率に関するデータを集めていただきありがとうございます。ここでわかったことは長野県には大学が少ないということで、地元大学への進学の可能性に限界があり、進学率が低くなっていることです。ただ、福井、愛媛県は長野県と同様な大学設置率ですが、進学率はよくなっています。このような県をベンチマークすることがいいと思いますので、データを取っていただければと思います。

それから野沢南高校の多部制への転換ですが、本当の目的が良く理解できません。地域に門戸を解放して住民との交流や、定時制の生徒や外国人の受け皿としての機能をもたせるということであるなら、交通等の利便性から判断すると、場所的に適切ではありません。同様に坂城高校が多部制に転換し上田地域からも通学する案にも矛盾がでできます。提示されている高校は、多部制高校としてあげられている目的と条件が合致していません。

また、塩尻志学館の例では、総合学科制に転換してから進学率が向上したという説明が事務局からありました。この説明を百パーセント受け入れて良いのか疑問があります。たしかこの学校は、何年か前は農業高校であったはずですが、それが普通高校に向けて変遷を辿ってきた、その過程の中で総合学科制の導入はしましたが、当学校の所在地の桔梗が原といわれた農村地域がベッタウン化し、人口が増加し、結果として応募の生徒が増加し、進学率も向上してきた、という影響の方が大きいと言えるのではないかと思います。

先回到総合学科制は専門性が甘くならないか、という論議もされましたが、この点も確認していきたいと考えます。丸子実業高校の実業教育の専門性が劣ることになるなら、これは問題です。

私はぜひ塩尻志学館の先生に来て頂き、本当のお話をお聞きしたいと思います。事務局にはこの計画をお願いしたいと思います。

これとともに、坂城高校の扱いは第1通学区で論議されており、この経過も見極めなくてはならず、現時点では、われわれとしては他部制をどうしていくのか、判断できない状況にあります。坂城高校の結論はいつまで待ったら良いのでしょうか。

それから、第1通学区の提示案では、長野高校の定時制は残すことになっていますが、なぜ残すのでしょうか。なぜ長野吉田高校の定時制は坂城高校に集約することになるのか、これも理解できません。この論法から言うと、上田市内の高校の定時制は現行の学校に残してもおかしくはありません。他部制高校の本来の目的を達成するためには、地域密着型の考え方を基本に場所を設定していかなくては、筋がとらなくなると思われます。

（飯島委員長）

だいぶ議論が、またスタートしたところへ戻っているような気がします。

前回学校再編案が出る前は、多部制・単位制あるいは総合学科について、ある程度魅力ある学校づくりという根本的な問題のもとに話し合いを持たれて、多部制・単位制これもいいのではないかと、総合学科もいいのではないかとという話がある程度煮詰まってきたなというところで、今回再編案の原案を提示していただいたわけですね。そのへんのところを含めながら、いざ実際に学校が出てくると、どうもまた意見が変わってくる。また意見が行ったり来たりということは、十分この委員会の議論が深まっているものだと思っておりますが、もう一度県教委のほうで説明していただきたい、また他の委員さんの中で、委員さん同士の間の中での意見も構いませんから、ご意見いただければと思います。

（小林委員）

今の太田委員のお話に付け加えになりますが、前の資料に、各高校の実践の様子を出していただきました。その中で、臼田高校が北農へ講習などに参加しているという事例もありましたが、そのことを考えた場合、今度考えておられる多部制・単位制高校で、単位制というのが私はよく分かりませんが、それはこの高校の中で自由に単位をとるのか。近隣の高校へ多部制の子どもたちが今後は「隣の学校へ行って専門課程があるからとりたい」というような、ある学校に在籍して他の高校へ行くというようになればいいなと思います。そこまで考えておられるのか。多部制・単位制と言ったときに、今日の説明からいきますと、柔軟な教育方法を工夫し外部講師も、との記載があるが、どうなっているのでしょうか。この中に今検討されている総合学制的な内容も含めて、多様なニーズとなると、それも含んでくるのか、また、そういうふうに含ませて広げていってもらいたいと思っております。

それから「統合後の定時制には」とあるのですが、統合後の定時制には生徒のニーズによる空き教室とあるが、これは誰が通うのでしょうか。その高校の子供たちが空き教室を利用するのでしょうか。いわゆる一連の説明の中でいきますと、どうなるのでしょうか。多部制・単位制の子どもたちがそこで1つの居場所として通ってもいいとなるのか、まだはっきりしないので、その2点付け加えてご説明ください。また、私の願いもお話しました。

（飯島委員長）

空き教室というのは多部制・単位制に転換した学校の空き教室という意味ですか。それとも、今ある定時制の空き教室ですか。



(小林委員)

たぶん、それを言っていると思います。

(飯島委員長)

その辺のところを事務局お願いします。

(篠原教育幹)

それでは、お願いします。お2人の委員さんのほうから、やはりこれまで議論されてきた多部制・単位制、それから総合学科というところが再度ということでございますので、そのへんをご説明申し上げたいと思います。

また、ご提案ありましたように、総合学科であれば、塩尻志学館高校の総合学科主任あるいは総合学科を今運営している教員もおりますので、その教員に話を聞くというのも1つの方策であろうというふうに思っております。制度的な面について私の方からお話し、あとはそれぞれ地域、あるいはそれぞれの細かい観点がございましたので、それを後からご説明申し上げたいというふうに思います。

多部制・単位制と総合学科であります。共通しているのは、やはり大事なことは単位制であるということであろうというふうに考えております。単位制であるということはどういうことかと言いますと、単位制と学年制と2つに分かれておりますが、学年制の場合は入学をして「1年生 2年生 3年生」と学年進行で進み、そして卒業していくというしくみであります。単位制はいわゆる様々な科目を配置し、様々な科目の中から自分の進路選択に応じてできるだけ進路選択に合わせた形で科目を選択し、そして修得していくということでございます。現在は、例えば塩尻志学館高校で言いますと、月曜日から金曜日まで6時間授業がございます。それが5日間ですから30時間と、その中に1時間は通常ロングホームルームという時間がありますので、29時間ということになります。

そうしますと、年間取得しますと29単位ということになります。29単位×3年間ですから、3年間でも目いっぱい取れるのが87ということになります。しかし、現在は制度上74単位とれば、卒業できるというしくみになっております。このような比較的緩やかなしくみの中で、実際に多部制・単位制にしても、総合学科にしても、さらに科目選択をしながら自分の進路に合わせて選んでいくという、この点が非常に大きいです。つまり、以前にもお話ししたかと思いますが、自分で自分の時間割を作るのです。この辺を志学館の先生方は、非常にメリットとして強く説明をしてくださいます。つまり、いろいろな場面で選択をして、自分の自己責任の中で授業を受け、そしてさらに先に進んでいくというそういう形の本来高校生としてなければいけない活動、そういうものがなかなか現状の学年制の中でとりづらい。とりづらい中で単位制をとることによって、そういったことも同時に、10代後半の大事な時期にある生徒諸君が学んでいくというところに非常に大きなメリットを置いております。

それからもう1つ、総合学科で言いますと、これはやはりキャリアガイダンスということになるだろうと思います。

( 太田委員 )

今ご説明は、塩尻志学館というのは総合学科でしたよね。そうすると、今の説明は多部制の説明ではなかったわけですか。何の説明をされたのですか。

( 篠原教育幹 )

単位制ということです。ですから多部制・単位制もやはり単位制の…。

( 太田委員 )

単位制という意味で使っているのですか。

( 篠原教育幹 )

そういうことでございます。

そういう中で塩尻志学館の場合、つまり総合学科の場合は、やはりキャリアガイダンスというところの、大きなメリットというものが時間割の中に組み込んでいけるということでもあります。

もう1つ多部制・単位制で言いますと、単位制のメリットと同時に、多部というところで、これは先ほどから委員さんの質問も出ておりますが、確かに定時制の生徒諸君の入学者の数というものが、暫増の傾向にはあります。ただし彼らが、定時制の設定された時間帯の中で学んでいくわけですが、多部つまり午前部、午後部、それから夜間部というふうな3部制になったときに、どの部が一番自分にとって、自分の生活の1つのスタイルにとって適しているかということが、やはり全国的な傾向で見ますと、午前部にかなり流れている、あるいは午後部にかなり流れているという傾向が実際上ございます。実際に長野県内の定時制の高校生にアンケートをかけて出されたということではありませんが、全体的な傾向として様々な多様な生活パターンというものが高校生たちにはあるだろう。そういったものに答える1つの手段としては、多部ということが考えられるのではないかとそんなふうに考えております。今までのことの概括でございますが、以上でございます。

( 柳澤教育主幹 )

長くなって恐縮ですが、もう少し細かい点でのご質問もあったかと思しますので、ダブるかもしれませんがご説明いたします。「多部制」というのは、あまり他県ではもしかすると使われていないかもしれませんが。「2部制」や「3部制」と言っておりますが、「午前部」だけで完結する、「午後部」だけで完結する、「夜間部」だけで完結すると、卒業単位をとれるということではありますが、そういうことで1つずつ独立した部があるということで、「2部」とか「3部」とか「多部」という表現をとっております。

「単位制」につきましては、これは「学年制」との違いです。簡単に言いますと、「学年制」は単位を全部とって次学年にあがります。「単位制」は留年がないということでありませう。

単位制の場合も、最終報告書の中にいろいろアイデアが出ております。例えば進学対応型単位制高校というようなアイデアが出ておりますが、これはいわゆる全日制の高校を単位制に転換をしていくとこういうことでございまして、全国でもいくつかの学校がこうい

う形で、できてきております。

総合学科高校につきましては、原則単位制でございまして、全国 250 校ほどできておりますが、全て単位制になっております。総合学科の導入の目的という話がございましたが、平成 6 年に制度化されまして、その時の導入の主旨は前にもご説明したかもしれませんが、いわゆる高等学校の学科、新制高校の発足当時から、普通科と当時は職業学科と言っておりましたが現在は専門学科ですが、普通科と専門学科のこの 2 学科制で新制高等学校発足以来やってきたわけでありまして、この平成 6 年当時制度化される前にいろいろな審議会もあったわけですが、この 2 つの普通科と職業科とこういう分けでは、現在の高校生の能力、適性、興味関心、進路、そういう多様化に対応できることは非常に難しいという判断がございまして、普通科は進学とか、あるいは職業科は就職という、そういう固定的な考え方がむしろ序列化などいろいろな問題を生じているのではないかとということで、平成 6 年当時そういうことで合意されまして、制度化がされて、普通科・職業科とを統合するような形で総合学科ができてきたという経緯でございます。今現在全国に 250 校程度設置されているということでございます。

それから、先ほど定時制のところ、坂城のお話がございました。坂城の方も、今日第 1 通学区の解説をお持ちでなくて分かりにくいと思いますが、1 つは地理的な利便性の問題、それからまたこの坂城町の地域の力と言いますか、地域の製造業との連携、単に講義中心の授業ということでなくて、職業教育も視野に入れたような多部制・単位制へ転換してはどうだろうということで、坂城高校を候補としてあげさせていただきました。

それに関連して定時制のほう、長野吉田の話でございましたが、長野吉田の定時制は夜の定時ではなく昼間の学校でありまして、いわゆる昼間定時制でございますが、在籍 19 名のうち、戸隠中が 1 名、長野市内から 13 名、飯綱中 3 名、常盤中 1 名、県外 1 名と、このような状況でございまして、現在昼間の定時制ということで運営しているということから、そういった入学者の状況を見ましても、多部制・単位制への統合ということが考えられるのではないかとということでございます。

それから、長野高校、長野工業高校は引き続きということでございますが、やはりこれは地理的な状況を考えますと、仕事を持って夜間の定時制に通われてくる方、そういう方々のためにも、それぞれ地理的な状況から配置しておく必要があるだろうということで長野高校、長野工業高校には引き続き配置ということになっております。

それから、先ほどの空き教室というお話でございますが、これは第 3 回の推進委員会の方で資料でご提示申し上げましたが、「定時制高校の再編整備にあたっての基本的な考え方」というのを示してございます。その中にございますが、募集停止をした定時制の学校の空き教室を利用して、生徒や保護者・地域の要望に応じて相談室を開設したり、学習室、相談室には遠隔学習もできるような配慮をしていくということでございます。そういう意味では、例えば、この東信地区の再編候補の中では上田高校と上田千曲高校ということになるかと思いますが、その空き教室には、必要に応じて居場所づくりと言いますか、相談室、カウンセリング体制、そういったことも配慮していく必要があるだろうと、ということでございます。

(飯島委員長)

はい、ありがとうございます。

委員長として 1 つだけ事務局へお願いしたいのは、多部制・単位制の議論に関しては、第 2 通学区は第 1 通学区の坂城高校の状況が非常に影響してきます。だからその資料だけは、第 1 通学区の多部制・単位制に関する資料をお出しいただくほうがわかりやすいと思います。次回お願いしたいと思います。

(中沢委員)

今の単位制・多部制のことで、私が思っていることを少し申し上げたいのですが、前のときも私は言っているのですが、単位制・多部制高校がどの程度今必要性があるのかということが、非常に疑問に思っているということは前にも申し上げた通りなのです。

確かに理念はいいのですが、生徒の多様な生活スタイルにあった多部制であり単位制である。あるいは生涯学習に向かった単位制・多部制である。それは確かに分かります。しかし、本当に今住民がそういうものをどの程度望んでいるかということは、前にも申し上げた通り非常に疑問に思います。

県下で 4 通学区にそれぞれ 1 校ずつ設置するということで、何かそれが固定的にきている気がするのです。そうではなくて、本当に必要性のある所、あるいは現在、具体的に言うならば松本筑摩高校がそれに近い状況にある。あるいは長野商業の定時制が単位制をとっている。そういう所から実績を持って、本当にこれはいいなとそういう支持が得られることから、今度は他の通学区にも広げていく。その方が大体説得力があると思います。

実際問題、この第 2 通学区の中で具体的に野沢南高校が 1 つのたたき台としてあがっていますが、それに対して賛成論というのはあまり聞かないです。そういうものを強引にやっていくというのは、やはり無理があるように思います。むしろ野沢南高校は、地域でいろいろな声を聞いたときには、やはり全日制を強く希望しています。そういうことで、将来生徒数が減るからという、上からそういうものが出ているような気もしますが、その辺をもう少し柔軟なものを持っていかないといけないかなと思います。

本当に今言っている他のところで実績あげていいということであれば、これはみんなが認めていきます。総合学科がそうです。塩尻志学館高校が実際に実績をあげて、それから生徒のいろいろなアンケートから見ても、高校生活に張り合いを持ってやっている。そういう実績があるから、これが広がってくると思います。それと同じように単位制・多部制も、ひとつのモデル校と言いますか、そういうものができて、そして実績をもって広げていくという方が私はいいと思っています。

それから、さっき坂城高校の話が出ましたが、これが上小の上田地区から通えるというところが、確かに交通の利便性はわかりますが、この北信地区については一体そのことについてどう思っているのか。例えば長野より北の方向の地域では、逆に坂城が非常に遠い状況であります。上小地区は近いのですが、逆に長野より北方面、飯山方面ではとても通えないと思います。そこに行こうとしてもかなり厳しい状況です。そういうことも思うのですが、その辺のところを少しまた聞かせていただければありがたいと思います。

( 芹澤委員 )

さっきの質問の方の多部制・単位制、総合学科に対する回答をしていただいたのですが、質問した人に「それでよろしいですか」と理解を求めた、「そういう説明でよかったですか」と確認をとらないと本当に理解していただけたかどうかというのが分からないのではないかと、そこから先また議論していかないとまた戻るのではないかと思うのです。その辺どうでしょうか。

( 太田委員 )

そうしますと、総合学科単位制という言い方が正しいわけですね。しかし、総合学科には単位制を付けて表示されていません。これはおかしくはありませんか。

( 芹澤委員 )

先ほどの説明、総合学科と単位制・多部制と一緒にちょっと説明したので、ちょっと誤解があったのではないかと思います。

私はこう思っているのです。まず、基本は単位制というのがベースにあって、多部制・単位制の「多部制」というのは午前部・午後部・夜間部の「部」であって、そういう意味の混交が「多部制・単位制」。しかしベースは「単位制」なんだと。あくまでも単位さえとれば、3年とろうが5年かかろうが卒業できます。それを合わせて多部制・単位制と言うのです。

多部制と分かれて単位制があるのではなくて、基本のベースがあくまでも単位制で、これは総合学科もそうであります。先ほど言いましたように、単位さえとれば良い、その中で今まで定時制だけであったのが、要するに人によって午前部あるいは午後部、その複合学科とか私は分からないのですが、いずれにしろ選択が高まる。夜間定時制ではなく午後の方に行ってみたいという人もいると思うのです。そういう選択の幅が深まる。そういう意味で、多部制・単位制は私はいいと思うし、総合学科はまた前回も言いましたが、初めから農業と決めて農業学校へ行ったところを、今そのままだけれども、総合学校へ行けば場合によっては自分は電気に向いているかもしれないと選択の幅が広がる。そういう意味で総合学科はいいのではないかと考えております。

そういう理解を私はしておりますが、違ったら訂正してください。

( 太田委員 )

そうしますと、総合学科単位制ということですか。

( 飯島委員長 )

総合学科という形で再編するところは、単位制でありながら、総合学科ということです。多部制・単位制というのは、今芹澤委員がおっしゃった通り午前の部・午後の部・夜間の部3つがあって、その中で単位制で卒業をします。

( 太田委員 )

私が言いたいのは、他部制だけが「他部制、単位制」といいながら、どうして総合学科制には単位制を付けないのかということです。言葉の使い方、定義で統一性を欠けば混乱をきたすことになります。一般の皆さんにも理解できるように、言葉の使い方には神経を使うべきではないかと思います。

( 小林委員 )

単位制というのは学年制で、その決まった単位を取れなければ1年生が2年生になれないと、こういう理解ですね。

( 芹澤委員 )

それは学年制です。

( 原 委員 )

休憩時間になりそうなので、急いで申し上げますが、前から私が申し上げているように、高等学校は学年制と単位制という2つの原理があるのです。これは学校の単位を取得して卒業していく、国語が4単位とか数学が4単位とかあります。それを取得して現在では74単位以上で卒業できるという、こういう単位取得の卒業までのプロセスなわけです。だから、多部制・単位制というのは、そもそも言い方は、本来は多部制の定時制という意味なのです。つまりそこに夜間定時制・午前定時制・午後定時制というのがあるわけです。「多部制定時制」というふうと呼ぶのが正しいですね。そして、かっこして単位制で運営するということです。総合学科は総合学科で、これも単位制で運営するということです。こういうふうに理解したら共通になりませんか。

( 飯島委員長 )

この件についてはいいですか。

( 太田委員 )

はい。

( 佐藤副委員長 )

多部制・単位制の話ですが、第2通学区について限定しますと、今までのいろいろの検討結果、いわゆる定時制に関してはかなり問題が解決したのではないかと私は考えています。1つは、小諸商業に定時制を残しますと言っているわけです。それから上田千曲と上田、これは坂城で吸収しますということです。あと野沢南が定時制を設置しておりますが、そこも非常に1つ問題になるわけですが、私は定時制に関しては大体問題はあっても、いい線というか大体こんな形かなと思います。

それから単位制高校に関しては、これは中沢委員と同じ考え方ですが、私はこれはどうしても検討委員会の報告に沿わなければいけないのかどうかと、どうしてもつくらなければいけないのかということが、正直疑問になるわけです。

なぜ疑問というか心配かと言いますと、多部制・単位制普通科は使い方によって非常によくもなるし、悪くもなると思います。例えば先ほどのご説明の中で、普通高校の中で、進学校の中で単位制普通科を導入すれば、あるいは自分は早く好きな科目を選び、場合によっては進学の場合だったら進学に備えられるという中で、限りなく自分の能力をアップできるというふうにも使えるわけです。ところが大体ご説明の中でもそうですし、我々委員の中でも漠然と考えている、例えば具体的に言いますと、野沢南に導入するであろう多部制・単位制普通科、これは中学の先生にも進路指導のことでお聞きしたいのですが、どういうところをねらっているかということ、今までのお話の中で語弊があって申し訳ないのですが、進路に非常に迷っているいわゆる進学に迷っている生徒が対象ならばと言いますか、学校のイメージダウンにつながりますよね。例えば野沢南にそういう形で導入されたのでは、今までしっかり定員も充足していますし、そういう中でやってきた高校のイメージが非常に落ちるのではないかと、こういう心配があるかと思います。本来今回の高校再編の話というのは、ある程度痛みは伴っても、そこで再編された高校というのは非常にイメージアップにつながることを目的でしょう。その中で単位制を導入することによって、具体的に例えば野沢南で導入されるとすれば、イメージダウンなのではないかと端的に思います。

中沢先生、市川先生、中学の先生ですよね。進路指導する場合に、野沢南高に例えば今のコースが導入された場合にどういう制度をイメージしていますか。それをまずお聞きしたい。私は上田高校に例えばこのコースを導入すれば、いい方につながると思います。どういう理由かと言うと、先ほど申し上げた通りです。以上です。

(飯島委員長)

いつも休憩とる時間を過ぎてしまいますが、このまま続けていいですか。それともお休みとりますか。

休憩とりましょう。佐藤委員からの発議は申し訳ないですが休憩後ということにさせていただきます。ではこれから 10 分、それぞれの時計のところで確認してください。

【休憩後再開】

(飯島委員長)

それでは休憩前に続きまして、会議を続けたいと思います。

前回の委員会では、多部制・単位制の必要性もあると思うが、各通学区に 1 校ずつ必要だというデータが欲しいという中沢委員さんからの話もありました。また、市川委員の方からは、中学校のほうの立場から、多部制・単位制というのは心配するほど生徒が集まらないというよりもたくさんの生徒が集まるので賛成だというお話がありました。また、荻原委員、太田委員からは多部制・単位制の中には進学型の単位制もあっていいのではないかと提案もあったわけでありまして、また、総合学科につきましては、和泉委員、市川委員、小林委員、それから芹沢委員からこれは大変にいい制度だというお話もあったように記憶しております。宮阪委員のほうからは、総合学科の中に普通学制的な選択肢があれば、というお話があったと思います。

そんな中から、だいが単位制・多部制、また総合学科については必要だという意見が委員の皆さんの大勢を占めてきた、また、できればたたき台を今度は示してほしいという形で、今回事務局からたたき台を示させていただいたわけであります。たたき台が出てきますと、実際の名前が出てきますから、だいがいろいろと意見がまた元の方へ戻ったような気がします、行きつ戻りつ前向きな検討をすることが大事だと思いますから、引き続きご意見等をいただきたいと思います。それでは佐藤副委員長の方から、直接名指しで説明を求めたということがありますから、中沢委員、市川委員の方から何かあれば、どうぞお答えください。

（市川委員）

私は高校でも進学に係をやらせていただいた関係で、多部制・単位制、総合学科、あるいは将来構想ということで、その学校での将来の高校のあり方ということで検討した経過もありますので、その当時は何も分からなかったわけですが、いろいろ勉強していくうちに、単位制とか塩尻の志学館でのご努力の様子とか聞いて、あるいは東京都の取り組み等を聞いてずいぶん分かるようになってきた経過があります。それはやはり時間がかかったなということを思い出しました。従って、やはりイメージにつきまして、ずいぶんギャップがある中でお話をさせていただいているのかなというふうに思いましたが、前半のお話を聞かせていただきました。私は結果的に、単位制について期待するものがあるいろいろな研究の中で大きくなってまいりました。本県では、例が塩尻志学館しかありませんので、そのところに集中してくるのかなと思いますが、私がこれから中学に戻りまして中学の子どもたちを送り出すにあたっては、そういったどこか近くの学校にこういう所があるぞと、塩尻まで行かなくてもここにあるということで進めて卒業させていきたいなと、そういう気持ちでお話させていただいているわけです。

それが一番の大きなところなのですが、ともすると、私たちは全くそんなことは意識していないのですが、世の中のメディアの中では輪切りによる進路指導ということを指摘されるところもあるかなと思います。それはやはり学力の序列化によって高校を見て、そして学力ということは、またいろいろな見方がありますので、学力テストの結果によって生徒を送りださなければならないというように結果的になってしまった点であると思います。それはとりもなおさず高校に主なシステムの違いがなく、どこも全日制と定時制に大き分けられるのみであって、それ以上のシステムの選択の要素がなかったからだというように思います。その点あえて言いますと、あるいは大学のシステムでしょうか、それが既に高校に降りてくるというわけです。

実は私この間生徒を登山に連れて行ったときにホテルで議論がありまして、定食を食べさせるか、それともバイキングを食べさせるかというところに議論になりまして、似たような点かなと思います。まさに今までの学年制は「定食」を食べさせるためのシステムしかなかったのです。しかしながら、単位制に期待するところは、あるいは「バイキング」ですね。これだけのものが用意されているので、その中から自分にあった、今日のエネルギーなりビタミンなりをしっかりとつけて、今日の1日のエネルギーを養うために何が必要かを考え、それできちんと自分の量に合わせて選んで食べなさいと、そういうようなことになるかなと思います。そういう点につきまして、これまでと、私たちの「定食」と「ア



ラカルト」ということになると思いますが、私たちの高校選択に対する生徒の指導に対して違ってくる点が出てくるかなと期待するところです。

従って、上位進学校、センター試験を目指して一生懸命、理数系や担当の選択科目で若干違いはありますが、おおかた国公立大学4年制を目指す生徒たちが集中した学校、これはある程度の「定食」でも若干差のある定食で対応できる高校であるかなと思います。提供するだけで進んでいける高校ではないかと思います。しかしながら、輪切りになっていくことは残念ですが、結果的ですが、あるいはその4年制国公立を目指す以外の学校においては、非常な多様性があるということです。この子どもたちは十分なキャリア教育を積みませなければならないと思います。

その点、いきなり「定食」から「自分で選択肢してやりなさい」ということが、これはなかなか自分で選べないのが高校生だろうと思います。中学を卒業してすぐの子どもたちが、こういうことを「何を食べて、どのようにやっていくか」ということを、きちんと分からないままに選ばなければならない、これが非常に問題ですが、この点は、塩尻志学館の例にもありますように、1週間なり、1カ月なりを十分にかけて、一人一人に対する綿密な指導がなされなければならないわけですね。これが大学生のレベルが高校に降りてきたということに対して、我々が十分に配慮しないといけない点だと思います。私はむしろそこに期待するわけです。

このように一人一人の内容に合わせて、力に合わせて、あるいは希望に応じて、一つ一つの、あるいは病院のカルテのようなものが用意されることが大前提かなと思います。その点につきまして、大変こういったシステムを必ず取っていらっしゃる学校に期待するところがあるわけです。

その点を私は強調して子どもたちを送りだしていきたいと思いますし、十分に許容量がありまして、どういうふうに募集をされるということは、午前部、昼間部、夜間部で、どのような募集定員で、どのようにされるかということは、詳細についてはまだ不安な点は多々ありますが、十分な許容量を持っていただいて、広く受けていただいて対応していただければありがたいというふうに思っております。以上です。

(飯島委員長)

ありがとうございました。それでは中沢委員お願いいたします。

(中沢委員)

単位制・多部制ができた場合に、こういった中学生がそこへ進学するだろうかということで、これは1つの予想なのですが、まず第1に考えられるのは、これは小学生の段階からあると思いますが、なかなか学校に、時間的なリズムに乗れないという子ですね。学校というのは大体、8時半からスタートしますよ。そして、5時間なり、6時間なりピシッと時間が決まって、そして1日が流れていきます。ところがいろいろな理由で、例えば身体的なものでもあったり、中には起律性障害というような状態で、どうも朝の調子が悪いとか。そのような生徒も実際あり、そのようなことで不登校傾向になるとか、朝遅刻してくるとかという子どももあるんですよね。そういった生徒にとって、自分の生活スタイルに合わせてながら、夜間部、あるいは午後の部でもいいのですが、そういうところで自分の生

活スタイルにあった学習をしていくと、非常にこれはメリットとしてあると思います。そういった子どもには勧められるなと思います。

それから単位制・多部制中で、先ほど意見が出ましたが、仮に進学をかなり重視した、形態の学校ができた場合に、そういった時間的な配慮がされていくという、そういう実績があれば、またそれはそれで、私は評価できるのではないかなと思いますが、今のところでの、その辺のことは分かりません。

それから、ただ、単位制・多部制においての1つのデメリットと思っているのは、学年意識、学級意識が今の全日制よりは少なくなる。今の学年制というのは、みんなが同じ学年で、いろいろな行事をやって、あるいは学級でそういったものをやって、そして連帯感を持ちながらやっていくんですね。そして試験に、仮にうまくいかなかった場合にはそれは留年することもあります。それをクリアしようと努力するだろうと、そういうことはありますよね。ところが単位制の場合は、とにかく留年ということはないわけで、自分の力で単位を取っていくということですから、学年というものはもちろんないわけで、そうすると学年意識はない、学級意識というものはどうなるかちょっと分かりませんが、どうもその辺が実際の学校生活をしていく上においては、今の学年制とは違ったことが出てくると。いい方向ではなくて、少しマイナスイメージとしてあるんじゃないかということを思います。

実際に話を聞いた中で、単位制を導入している長野商業の定時制においても、昼間の定時制もありますが、そういった中で、本当に単位を早くと言いますか、きちんと取っていくと、3年でも可能だということも聞いていますが、中には逆に、6年、7年というようなことで時間がかかっていると、これは方向転換をしたほうがいいんじゃないのということ指導の中に入れていっていると。そういった中において、単位制というものは、本当にその生徒が主体的に学習意欲に燃えていかないと単位が取れないということもある。そこら辺も、考えていかないといいかなというふうに思います。

(西村委員)

この会議も6回やって、今日7回目ですね。それで先ほど後半戦の冒頭に委員長のほうからお話しがございましたように、それぞれの認識に温度差があるというのは否めないですね。これはやはりしょうがないことですが、行ったり来たりしながら議論を進めていくのは、これは当たり前なことなんです。先ほど太田委員からも提案がございました様に、皆さんのイメージを、つまり、もっと具体的に考えられる「イメージ」をつくって、ある程度共通の認識を持たないと議論をしていくことはできないと思っています。従って塩尻志学館高校について提案しますが、ぜひ現場の先生に来ていただいて、具体的なイメージで説明していただきたいと思います。そうすると皆さんそれぞれのイメージが固まってくると思います。

それから多部制・単位制につきましても松本筑摩、長野商業の現状。先般の富山県の場合等。多部制・単位制の高校のリストの資料が出ましたが、「こういったメリットがあって、こういう学校にしていますよ」と具体的に筑摩、長野商業、富山県の高校の説明を県の方にしてほしいと思います。多部制・単位制については、良い制度だからこそ、検討委員会が出してきた提案ですので、今の考えだと、みんな悪いイメージでとっちゃっていますの

で、その辺を払しょくするために具体的なイメージをみんなに植え付けるようにしていただきたいと私は思いますし、提案します。

（飯島委員長）

ありがとうございました。その件については、それぞれの学校の先生が来て説明ということは、事務局、可能ですか。

（西村委員）

今の話は、塩尻については説明していただいて結構ですが、多部制・単位制につきましてはなかなか難しいかもしれませんので、それは県におまかせしたいと思います。

（飯島委員長）

事務局が変わって説明するとか、そういうことで可能ですか。

（篠原教育幹）

はい。そのようなご希望があるということであれば、そんなふうに対応したいと思います。

（太田委員）

おかしい発言にとられるかもしれませんが、ここでわれわれが論議するにも、答申案が前提にあっての上で、その枠内でしか「魅力ある高校づくり」を提言できないのは、非常に歯がゆい思いをします。この枠を取り外して、もっと選択肢を広げて、改革案の論議ができないものかと考えています。

また、他部制が事務局の説明とおり、お客様である学生にとってそんなにも良いものであるなら、それが魅力ある高校づくりにつながるものであるなら、どこの高校でも導入されたらいいのではないかと思います。これに転換するにはそれほど難しいとは思えません。各地区に一校という枠も取り外したらどうでしょうか。

それとともに、最近わかってきたことは、総合学科制、他部制とも、迷える、悩める若者のための救済措置の色彩が強い学校づくりであるということです。

総合学科制は進路の方向に迷う学生のために、授業科目の選択の裁量権を学生に与えるという学校方式であり、他部制は登校拒否等の経歴をもつ、悩める学生のために居場所と時間を用意することが重要な目的である学校方式と言えます。「教育改革」といわれるものが、これだけの「改善」でいいのでしょうか。先ほど委員長からもありましたが、救済型の改革も必要ではありますが、進学型単位制高校の新設というような、攻めの改革にも積極的に取り込んでいかなくては、一方的な改革になってしまうと思っています。教育界に新たなうねりを発動していくために、この委員会では新たな提案をしていくべきではないでしょうか。

(和泉委員)

私も多部制・単位制には賛成ですが、1 つは、皆さんの意見を聞いていると、これをどういうふうに理解して、そういうメリットに持っていくかということが、もう少し具体的にしておかないと、私はある点で逆に、隣に野沢北校があったら、普通科を狙って、漫然とやっているという吸収されるファクターがあるのではないかという不安もあります。

しかし午前、午後部となっていると、例えば地域に、あるいは学校に自分がやりたいスポーツでも、例えばピアノでも、先生がいないからちょっと時間を利用してやる、あるいはもっと専門的なところを早めに勉強したいとか、そういうことの、運用されているイメージをもうちょっと具体的に説明されていかないと、逆に私は、機能化して制度化をしていくのであれば、学校が運営、経営者の考え方になったら、今度は教える先生のメンバーを、言葉は悪いかもしれないが、質を落としていくかもしれない。どういう学校の機能にするかということは、もうちょっと、1 校にするか、内部の、こういうことの人材をする。それが最初の出発点の「魅力ある学校づくり」ということになるのではないかと。

「どういうことを狙っているんだ」ということは、もうちょっと具体的に PR して、そのよさを他県から吸収されたことを具体的に話された方が良いと思います。

私の思っているイメージはそういうことを、そして進学したいとか、あるいは自分の専門的なことをもっと早めにスタートしたいと、あるいは通常普通高校に行っていたら、時間を終わってからでも補習があったりして外に出られないから、土日だけではリカバリーできないという方については、時間的な有効性、あるいは距離の有効性、あるいは教えてもらう先生を選ぶセレクションについて非常に柔軟だと思っているんですよ。そういうことがちょっと周りから聞こえてこない、逆にもたもたしていて、変なふうになっていると、くされていきますよということを逆に危くしている。だからそうならないような、コミットや方向を明確にして説明していただきたいというのが、多部制・単位制については、私の意見です。

それから、あと1つは総合学科については、最初のところに戻りますが、利便性の話をすると、我々家庭から見ると、家庭から学校の距離を考えます。ところが、県の話だと、要するに、どっちかという、学校中心に距離を考える。これは1つの問題点だと思っています。

17 校から 15 校に減少させるということですが、生徒数の減少については、現在言われていることよりも、私はもっと前倒しで来ると思っているんですよ。そういうことについて、ではどういうことを考えていくかということになると、私の先輩は川上に住んでいて、野沢北高に行くときには下宿していたというのです。こういう総合学科的なことは、ある程度広いエリアで考えていくときに、長野県を考えたら、山か沢か距離は当然あることで、こういうことをセットに考えて、利便性を論じ始めたら、みんな都合になってしまう。ある程度のところでは対応していかないといけないので、この前コミュニティという話をしましたが、寮という仕組み、あるいは下宿に対しての、それはリクエストなのか補助金なのかは別にしても、そういうことをインフラの中にある程度セットで出さないと、1 校つくっていったって、それで今、「何分かかる、何分かかる」と言っても、小諸から佐久方面へ乗り換えるといったって待ち時間があるんですよ。そういう端的な数字じゃないんですよ。出てくるまでの時間、部活していた、だから学校だって教育の中で変えてきた

でしょう。昔は徒歩だったんですよ。自転車を認めたでしょう。部活するときはバイクも認めたんでしょう。

インフラは時代とともに変化します。そういうことでミニマム長野の体制の中では、これからの学校数の問題を取り上げる中で、その人たちを救う。少なくとも下宿かということだと思っていますが。そこで、下宿してでも行く、それはなぜそういうことを考えているかということで、やはり佐久長聖などは、この前県で出された資料から言うと、距離は遠いんですよ。それでも来ているんですよ。教育費を見たけど高かったじゃないですか。距離が遠くて高くて、なぜ来るかということは、あるといたら、魅力なんですよ。

だから今、「官と民」の話をする時には、どうもその危機感にギャップを感じます。だから皆さんは、「来てくれるのか」と話されますが、最初に出ました、なぜ私立高校の募集定員 18%の比率というのがあるのかを知りたいのと、逆にみんな人が来るんだったら、学級が多いというのを認めることよりも、なぜ評判があるのに、なぜ募集定員を減らさなければいけないのか、むしろ今我々が論じていることを逆行しているところがあるということ、認めたくないという話にしか私は思えない。むしろ「民」の意味の中で利便性が遠くても、授業料が高くても、魅力ある学校に親子も納得して、生活の中で、苦労しながら出すということについて、本来私は、教育、学校はそういう形であるべきだと思うから、18%ということがあるから、減らしていかなければならない「民」をある程度入れて、活性化してって、なぜなのかを、案を考えていかなければいけないと思います。

ですから私は 18%という数字はもっと緩めてもいいんじゃないかと思います。逆に応募者が増えて、1 学級増えたということ、認めてあげたほうがいいんじゃないかと、なぜならば、生徒が来ないところからあるんだからしょうがないじゃないですか。というのが私の意見です。

だからここで質問しておきたいのは、18%というルールはどういうルールなのかを、明確に、要するに毎年毎年の見直しなのか、ある程度は、要するに折衷案なのか、あるいは何かの流れなのか、その辺のところについて説明をしていただきたいと思います。以上です。

(飯島委員長)

ありがとうございます。なかなか厳しいご意見でありまして、公設民営という話もある時代ですし、株式会社に学校を任せるという話もありますし、少し前の新聞記事には、あれだけ国立大学が赤字で騒いでいたのが、かなり黒字になっている大学が多くなっているという記事がありました。私は金額的なことは覚えておりませんが、かなりの金額が黒字になっているという話がありました。そういうことから考えると、今の和泉委員の意見を、「うーん」と思って聞かせていただいたわけです。

それではほかになにかご意見お願いします。

(和泉委員)

18%の件を教えてください。

(篠原教育幹)

今、和泉委員さんからご指摘がありました。前段の部分ですがよろしいでしょうか。

私どもも、ただ学校をつくって、そこで座しているという意識では到底ございません。再三私はお話し申し上げていますが、塩尻志学館の成功というのは、システム的によさが確かにあります。ありますが、中でいかに先生方が努力したか、これが非常に大きい。これは確かに言えることで、またこの推進委員会の機会で塩尻志学館の先生をお呼びして、ぜひじっくり伺っていただきたいというふうに思います。

それから 18%、82%の件であります、これは和泉委員さんのおっしゃったうちの、「流れ」というのが 1 つございます。非常に大きな流れがございます。と言いますのはかつて、いわゆる急増期がございました。この急増期に、確かに公立の何校かつくりました。ただし、旧第 5 通(上田地区)、旧 6 通(佐久地区)もできなかったわけですが、他地区では新設高校をつくりました。それで対応しようと。それでも対応しきれないという部分がございました。これはもちろん財政的な面もあってということであります。そんな中で私立高校に生徒をお願いしてきたという経緯はございます。そういう経緯の中で私立の高等学校の学校法人の皆さんをお願いしてきたわけです。お願いしてきた中で、では急減期になったから、すべて公立でというわけには、当然、長野県全体の学校教育ということを考えると、いけないわけです。公立には公立のよさがあり、私学には私学のそれぞれの建学の精神があり、そういう中で生徒たちを鍛えているということがあります。

そういう中で、それはやはり保護者や生徒たちの選択というものに当然任されるべきことであります。そういった中でやはり私どもも、私学の発展と、それから公立の存続というあたりのところで、「公私連絡協議会」というものを設けまして、毎年、毎年の中で、お互いに来年度の中学 3 年卒業者数を見ながら、特に、私学のほうからはどれだけの学級数が望まれるかというご要望もお聞きしながら、公立のほうでも学級数を決めていくと。それがたまたまここ数年は 82 対 18 という数字になっているということでございます、当然現在そうですから、平成 31 年までの統計の中ではこれを使わざるを得ない。

今後、例えば 5 年後 10 年後に、どのような比率になるかということは、これは私どもも非常に計算しづらい、1 つの長野県の社会経済情勢というようなもの、あるいはもっと言うと、日本国内のさらに大きな交通網の発展であるとかいった様なことも、当然加わってくると思います。ただ、現在のところは、そういう流れの中で 82 対 18 という数字があると、それで年度ごとに話し合いをしながら双方納得いく線で決めていっているというのが現状です。

(和泉委員)

確認ですが、では 18%については、私学のほうから「こういう形にしたい」という要望に対して、要するに、押さえているのか、ニアリーに認めているのか、運用状況が聞きたいのですが。

(篠原教育幹)

ニアリーの中でやっております。と言いますのは、やはり私学のそれぞれの学校法人の経営者の皆さんも、例えば昨年度、8学級募集であったが、6学級分しか来なかったというところは、非常にシビアにまさに和泉委員さんのおっしゃるとおり、シビアにその辺をお考えくださいますので、私どももそういうご要望を聞きながら、じゃあ、公立のほうで引き受けようとか、もう少し私学のほうでお願いしますとか、そういった話し合いの中で決めていくというのが現状です。

(飯島委員長)

よろしいでしょうか。ほかにどうぞ。お願いします。

(荻原委員)

丸子実業が総合学科の候補になっているわけですが、そこに学びにいく建設、商業、あるいは、3クラスは残る、志望してもそのコースとして残ると思うのですけれども、応用生物や、農業、被服は難しいと。通学する方もそこから臼田というわけにはいかないし、そういった格好で言えば、総合学科になったときには、具体的にはたぶん、200人くらいの普通学科的ものが上田地区に新たに誕生するということで、そうなる具体的に言えば5区から丸子実業に行きたい人は、交通の便の良いしなの鉄道沿線などは、そういった格好ではいけると思いますが、交通の便の厳しい所からは具体的には難しいのではないかと思います。

その反面、反対に6区で野沢南高が単位制になれば、そこにいる6クラス243人というものが入学は、具体的にほかに全部行くわけではないのですが、普通高校へ行きたいのは、岩村田、臼田、小諸高校、その選択肢の中に私学の推薦というような格好であると思うのですが、そうすると野沢南を志望した243人は、具体的にはたぶん、佐久市内と南佐久がほとんどですから、その3校へ行かざるを得ないと思います。そういうことになる、例えば5区に普通科の枠が増えて、6区には普通科の枠が減ると、そういうのが、教育委員会がいうニーズに合わせるというか。そういうことで、5区の広さや、その辺は考慮されないで、ターゲットとして野沢南校がどうして選ばれたのか、ハッキリしないわけですね。

そういうところで多部制高校が何人、理想的に言えば、県の目標は5.5ですか、5.5に、そんなに大きいものにするのかどうか、そういった意味で例えば5区、6区で今まで243人全部が普通科高校に進学するわけではないですが、希望した場合には今までの野沢南高校が持っている、例えば大学推薦枠なり、いろいろな学校の歴史があるわけですけれども、そういった面で野沢南高へ行きたいという子どもたち、近年、野沢南高は大学、短大進学が、そういったセンター試験志向で学校側も努力しているわけですが、そういったところへ目指した子どもたちはどこへ行ったらいいのか、というところがやはり心配しなければいけないのではないかと、そういったところで、子どもたちから見れば、あるいは保護者から見ればそういったところはどうなっているのか。

具体的に5区、6区で交流しているのは、本当に何パーセント、1割くらいかと思いますが、その辺県教委は野沢南高をターゲットにしましたが、その子どもたちをどう考え

ているのでしょうか。よろしくお願いいたします。

（飯島委員長）

先ほどの説明があった中の人数ですか、それに合わせてもう一度ご説明をお願いしたいと思います。

（柳澤教育主幹）

中学校の卒業生数の動向を見まして、もう皆さんすでに資料でご覧いただいているとおりでございますが、今後減少傾向にあるという中で、例えば今、野沢南校の話が出ましたが、6 学級すべてということではなく、自然減ということもございますが、中学校の卒業生数を見ながら、それに見合う募集定員をきちんと確保していくということは、当然のことでございます。

この本日お示しした中にもございましたが、この近隣でありますと、今お話しがありました、野沢北、岩村田、臼田こういったところで、十分中学校卒業者のニーズには、普通科の場合対応していけると、このように考えております。

また、先ほど多部制・単位制のイメージというようなお話しで、立ったついでで恐縮ですが、前々回第5回、長野県で今考えている多部制・単位制高校のイメージということでお示ししてございますので、またその資料等もご覧いただいてイメージを膨らませていただければと思いますが、先ほど少し、デメリットのお話しがございました。そうすることは十分、私どもも承知しておりまして、自分の力でなければやっていけないのではないかと、あるいは学年制というのが薄れるのではないかと、このようなご指摘がございましたが、そういう意味では総合学科も同じですが、ガイダンス機能というものを大変重要視しているということで、個別的な指導、相談という体制を取っていくということは、当然配慮していくべきことだろうと、こんなふうに思っております。

これは1つのシステムでございますので、単位制というシステム、多部制というシステムを使ってより魅力のある学校にしていくということで、いろいろなバリエーションは考えられると思っております。以上でございます。

（飯島委員長）

ありがとうございました。

（佐藤副委員長）

私も先ほどの荻原委員の質問の中で例えば現在の6学級はどこへ吸収するのかということも含めて、先ほど、私は質問したわけですが、この多部制・単位制という制度は、先ほども言いましたが、導入すれば非常に活性化する学校と、あるいは活性化とは逆方向に進む学校が出てくるのではないのかなと思います。

先ほど単位制の制度について、私は進学型の単位制を導入するならば、ある意味では学校の活性化につながるのではないかとこの話を申し上げたのですが、たまたま野沢南という具体的な名前が出てしまったので、申し上げるわけですが、先ほど中学の先生方のご説明の中で、少し語弊があるかと思いますが、どちらかといえば、学力が遅れがちな生徒



を対象にした、多部制・単位制の制度の導入というようなイメージがどうしてもするわけです。

そんな中で県教委が最初に具体的に「野沢南」とか、「望月」とか名前を挙げちゃったわけですね。それが、挙げなかった時点であるならば、場合によって「この学校にこの制度を導入したら、この学校は活性しますよ」ということが、我々委員会でもある程度話し合いができたんじゃないかと思いますが、この時点でこの学校じゃなくてこっちの学校にこれを導入したら、こっちの学校だったらもっと活性化しますよという話しが、ある意味ではできないですね。そういう中で私はこの導入の仕方は非常にリスクを伴うのではないかなというふうに考えています。

ですから先ほども申し上げましたように、単位制コースですね、これを導入するならば、イメージアップにつなげるというのが、最大の目的ですね。それを導入することによって、その学校のイメージがダウンすることがあってはならないわけですね。何のために再編をやっているか分からない、そういうことを十分考慮した上で、やはりこの制度は導入していかなければならないのではないかな。非常にリスクが高いと私は思います。

（原 委員）

前回の最後に委員長さんがなぜ校名が出たかと、なぜ野沢南かと、なぜ望月かと。その必然性を出していただいて、議論するということでした。それで再三私を含め、なぜ野沢南か、今の佐藤副委員長さんの心配な向きを、縷々お話しがあって、やはりなぜかということについて、まだ十分に説明がないわけです。これはあらためてお願いしたいと思います。

全く別の問題について、時間も限られておりますので、初めて発言することですが、望月高校にかかわって、次のことを申し上げたいと思います。資料の1ページに望月高校の簡単な沿革がありますが、その沿革のごちゃごちゃしたことを言うつもりはありません。私もかなり長く望月高校に勤務しておりましたので、実はこういう事実があるということ、委員の皆さまに承知していただきたいのであります。

昭和24年に望月高校が県立移管されて、その前年の新制高校として再スタートを切ると。つまりそれまでの望月高女、それから戦争中につくられた望月中学、これが合体して今日の望月高校が生まれてきたわけです。県立移管の時に大変非常に厳しい条件が付けられます。これはこの地域でいくと、軽井沢高校もしかり、小海もしかり、すべてそうなんです。文部省の高等学校設置基準に沿う、施設、設備、これを地元負担でやれという指示なわけです。昭和24年に高校がスタートしますが、それから3年かけて文字通り地域主体、地域の人々は、蓼科高校も同じですね、大変な苦勞をするわけです。これは本当に筆舌に尽くし難いと言っていいと思います。金額については申し上げます。

こうして望月を始め、幾つかの地域の山間部にある学校は、施設、設備を整えてそれを県に寄付し、県が採納する。つまり寄付採納をもって、いくわけですね。実はそれでことが終わったかと思ったのですが、調べてみると大変なことがありまして、望月の場合、1956年、昭和31年ですが、グラウンドを広げる、この時にも地元負担、PTAの負担、同窓会の負担で、仕事が進められていますし、1963年、昭和38年に体育館がつくられていますが、これも県からの補助も若干ありますが、ほとんどは地元負担なんです。つまり、県立高校

といえども、実は長く長く県立移管後も地元の負担でこの学校を支えてきたんですね。立科の遠山町長さんもいらっしゃいますから、それは蓼科高校についても同じことだというふうに思いますが。つまりそれが1960年代、70年代の始めまで続くんです。望月は確か来年度80年を迎えると思いますが、80年中、40年間も地元の負担でこの学校は運営されてきたと。そのことを1つ事実として、私は申し上げたいわけです。

そして、そこから出てくる1つの問題は80年中40年間という2分の1に及ぶ、地元の人々の学校維持の努力を考えた場合に、先ほど、「官から民へ」という話しがありましたが、官側が、一方的に地域コミュニティが支えていた、それをあえて民ということもできましょうが、それを今回の計画でなくすと、これはやはり乱暴ではないでしょうか。ということを上申したいのです。

（飯島委員長）

これに対して対応意見はいかがでしょうか。

（遠山委員）

今の先生のご意見、私どもは実際経験してきています。我々の先輩たちは地元の高校の為に物心両面でどのくらいの力を尽くしてきたか計り知れません。恐らく、地域は市街地に見られない苦労を積み重ねてきているのだが、今その地域高校が統廃合の対象となっているのです。

我々の先輩は今の状況を見たら怒りますよ。本当に何もわからずこんな枠組みを作って学校の数を減らすことは絶対に許せるはずがないと思います。

やむを得ず聞いている話であって、本当に危険な話です。訳のわからない学者が「学校の伝統や歴史を守りたいなら博物館にでも行って勉強したら良いではないか」とバカなことを言う。恥ずかしいことだ。最近この手の学者が多くなって困ったものだ。学校に庭の石一つ運んだことがないような者が偉ぶって、地域で苦労して育てた学校を地域エゴだというが、おかしいことで、自分たちの力で学校を育てることこそ教育の原点だということを忘れては困る。

それから、何で都市部の学校で6学級以上の学級数をもっと減らさないのか。都市部の学校は100%県民の税金で建設維持され重視されるが、地域が「米百俵」の精神で積み上げた学校を軽視するのはどういう事か。

学校はマネジメントではない。改革について言いたいことはたくさんあります。中でも野沢南高校の問題など言い出したらきりが無い。本当にひどいですよ。

だけど、流れがこうなっているからあえて言いませんが、とにかく長野県の教育は内容をしっかりやる以外にないですよ。数は自然に淘汰しますよ。やらないところは駄目ですよ。そんなところを感じているわけです。以上申し上げまして、よろしくお願いします。

(太田委員)

魅力ある高校づくりは、限られた数校の総合学科制、他部制への転換だけでは実現はできないと考えます。全ての高校がそれぞれの持ち味を生かして、魅力ある高校づくりに立ち上がってこそ、長野県の教育レベルの向上を目で見ることができるようになると思います。これが真の改革ではないでしょうか。

今回提示されている対象高の教育方式の転換、これを改革というのか、改善というのか、私は改革とは思えないのですが、これだけでは「魅力ある高校づくり」は成り立たないと感じています。

それから、先ほど遠山委員からありましたが、学校経営に関してですが、各学校の先生方が、校長先生を先頭にして、どのような方針をもって、どう取り組んでいらっしゃるのか、取り組みの姿勢にも大きく影響されると思います。これについても実態を事務局からお聞きしたいと思います。

また、先生方への評価はどうなっているのでしょうか。民間企業は人事考課の結果を給与に大幅な額を反映させておりますが、行政に携わる皆さんはどのような評価を受けているのですか。

国立大学が法人化され、先生方の評価も大変シビアにおこなわれるようになっているようです。この間信州大学の繊維学部に行った折、掲示板に「教授の評価投票をネットで実施中」という告示がありました。国立大学でも公開の場で、先生方が評価されているようです。

また、最近ですが、私の知り合いの中国、上海の大学の教授から、「太田さん、今年私は2番目になりました」と言われまして、なんのことかわからなかったのですが、よく聞いてみますと、中国の大学はみな国営ですが、あの中国の大学が、繊維学部と同様に、学生による全員投票方式で評価をおこない、結果を公開しているらしいのです。

評価はお医者さんの業界でも、あたりまえにおこなわれるようになってきています。民間の医療機関の人事考課の重要考課項目、コアコンピタンスは、「患者のリピート度合い」ということです。あの先生にまた診ていただきたい、というところに評価の重点をおくことは、われわれにも納得ができることです。

事務局には先生方への評価の実態についても、機会があったら説明をしていただきたいと思います。

(飯島委員長)

太田委員からは当初、委員会が発足したときにも、話しが出ましたね。それから、検討委員会最終報告の中にも、高校教育での課題の2番目の所で、大きく教職員の資質や労力の向上というのが出ているんですね。これに是非力をそそいでほしい。ただこの件についてこの委員会が言っていくと、大変いろいろ問題が出てくるから、これは県教委の努力にお願いして、ここでは再編のを中心、魅力ある学校づくり、人づくりほうは県教委にお任せして、その先生がどうのこうのということは、ちょっと、いろいろ問題があるからなということで、取りあえず保留してあったことですね。

( 太田委員 )

そうですね。対象の 1、2 校だけを改革しても、「高校改革」とはいえないですね。しかし、私は蓼科高校の事例を聞いて、救いを感じました。地域と学校が密なる連携を深め、共同して学校づくりに励んでこられているところに、これからの魅力ある高校づくりのためのヒントを頂きました。遠山委員の今までのご努力に敬意を表したいと思います。

蓼科高校の卒業生は当社にも多数入社していますが、地道に、まじめに努力され、気が付けばその職場でなくてはならない貴重な人材となっています。

過日も蓼科高校ジャズバンドの紹介をテレビで放映していましたが、これも学校づくりの成功例と思いました。

( 飯島委員長 )

スウィングガールズですね。

( 太田委員 )

バンドの学生諸君が、非常にいきいきしていました。あのような姿をみますと、改革というような手立てをとらなくとも、魅力ある高校づくりは可能ではないかとも思います。

それぞれの学校が、高校長のもとで、先生方全員参画の協力体制を敷いて、知恵を出し合い、強み、特色を生かし、教育に新たな息吹を吹き込むことができれば、それが魅力になるはずだと思います。

民間企業では中期経営計画の策定がさかんにおこなわれています。学校でも、校長が主導で全員参加で魅力ある高校づくり 3 ヶ年計画を策定し、この中で施策を整理し、それぞれの先生に目標管理制度により課題をおとし込み、これをもとに考課するというような管理方式も考えられます。

このような、学校づくりのための方法論も是非ご検討いただきたいと思います。

( 飯島委員長 )

はい、ありがとうございました。

( 和泉委員 )

今の話で、私も魅力ある改革ということの中で、「こういう仕組みがありますよ」という話が、冒頭の中で説明があるとき、先ほど事務局が発言された中にもガイダンスがあると、逆にそれは危くしていますと。危くしていたら、どういう仕組みで危くを取り除くかがなければ駄目ですよ。私たちはいつも求めているのはそういうことです。だから「ガイダンス」という言葉は、もうカビが生えたような言葉であってということよりも、先ほど今の太田さんの話しをしていくと、今まで学校運営というか、経営というかは別で、先生、父兄会、生徒、この三つ組みの、後は少し地域が入った。この運営母体を例えば、ガイダンスという言葉でやるんだったら、母体を変えて、例えば評価システムを入れると、あるいは評価システムを入れて改善をしていって、それがレベル評価にアップしていくようなシステムの導入だとかということが、具体的なのです。「ガイダンスをやっています」ということは、手段ですよ。

学校経営の中で、協力や人材や、あるいは求めている方向がちゃんと、やはり理解されていて、地域の応援団、あるいは我々なんかは、子どもが大きくなって学校に携わる機会なんてないですよ。ましてや少子高齢の中で知恵を持っている社会人はいっぱいいるけれども、子どもさんだけを預けている方となるとだんだん少なくなる、だけど教育は大事だと。そういうことの中で、僕は魅力ある高校をつくっていく中で、先ほどのような紋切り型の言葉よりも、その運営そのものを仕組みを変えていくとか、あるいはこういうことでやっていきたくとか、そういう意見が出されないと、もう逆に提案しかないんですよ。学校経営についてそれなんです。

校長先生が先生を評価するのだけれど、それを今度は別の視点で、運営そのものや、あるいは設備のメンテや、いろいろなことをやはり評価していったって、それを答申する、あるいは意見化して具体化するとかね、今経営の問題をこうやって議論していくべきで、現在長野県は改革が遅れており、後ろから5番目のくらいのとの話しですが、やはりこういう形が、今度は学校教育の中で、いろいろ地域参加だとかをやることをむしろ考えるべきではないかと思います。そしたらやはり、甘えていたりしたら、おしかりを受けるかもしれないし、うまくいったら評価してくれるかもしれないし、応援団が増えるかもしれないし、そういうことを仕組みの中に、持たないと、ガイダンスとかそういう言葉よりも、何かもうちょっと提言がほしいなと思ったので、太田さんの、ちょっとついでに言いましたけれど、失礼しました。

（飯島委員長）

ありがとうございました。時間になってきてしまいました。先生方の努力が魅力ある学校づくりというのは、事務局でも申しておりました。大変難しいところで、一時、学校でも勤務評定なんていう言葉がはやったことがありましたね。そんなことから、事務局のほうから。

（篠原教育幹）

ご意見を伺いまして、私どもの公立学校の自己PR能力といいますか、この脆弱さをつくづく感じたところでございますが、例えば専門学科はどうするのか、あるいは魅力ある学校づくりはどうするのか。この辺につきましては、いわゆる開かれた学校づくりという大きな流れの中で、例えば高等学校で言いますと、各学校にホームページがございます。ホームページを開いていただきますと、「各学校ではこんなに魅力ある高校づくりを行っている」といったようなことがあります。私は事務局だからということではありませんけれども、各高等学校とも非常に努力をしながら魅力づくりを行っている。これは資料としても、委員の皆さま方にお渡ししてあるものでございますので、その辺を検討していただきながら、さらにこんなことはどうかといったような提言をいただければというふうに思っております。

それから評価という点でございますが、これは平成15年から学校自己評価制度、これは今お話しがありましたように、学校の目標管理、学校の目標をつくり、これも長期的な目標、中期的な目標、短期的な目標と、こういうものをつくりながら、1年間をとおして学校で活動し、そしてその結果を評価すると、そして次年度に生かしていくというものです。

それから教員一人一人でございますが、今年度から学校長、一般教員共に、試行的な面では、一般教員ではまだございますが、教員評価制度と。これも目標評価、目標管理に基づいてこれを行っております。これが、具体的にどのように生かされていくかというのは、平成 15 年からの学校の自己評価、そして今年度からの教員評価ということでございますので、少し時間が必要ですが、ぜひこの辺が学校としても生きるような、そういう仕組みに育てていきたいと、そんなふうに思っているところでございます。

さらに、学校の対応でいいますと、学校評議制度というものもございまして、これは学校長の経営方針に対して、意見を申し述べていただく、そういう評議委員の皆さんを各学校とも 6、7 名から多いところでは、12、3 名まで学校長がお願いしまして、そして学校評議委員の皆さんに、いろいろな活動をしていただいている。

今、ここに小諸高校の西村校長先生がいらっしゃいますけれども、例えば小諸高校では、学校評議委員は公募、皆さんから一部募集して、幅広くご意見を伺う。そういった意味で時代の趨勢の中に高等学校も取り残されるということではなくて、内部からもやはりそういった努力をしていかなければいけない、そんな時代を迎えているということは確かなことでございます。以上です。

（飯島委員長）

ありがとうございます。この先はまだまだ意見が続くわけですが、時間が 12 時を回ってしまいました。たたき台といいながら、大変な資料をいただいて、今日の 3 時間これだけで議論を終わるわけですが、これは大事なことでありますから、単なる資料の説明のやりとりだけでなく、次回も十分この論議を進めたいと思っております。

ぜひまた、もう一度資料をよく、お読みになって、また次回では貴重なご意見をいただければ、ありがたいかなと思います。また事務局のほうにはいろいろなお願いがありました。それぞれのことにつきましても、1 つお願いしたいと思います。

総合学科の先生からの直接の説明という話もありました。その点も含めまして、事務局のほうで、次回のほうはご検討をお願いしたと思います。

次回の日程を事務局のほうですみません。お願いします。

（植松主任教育支援主事）

それではすみません。お願いします。

次回の日程でございますが、9 月 25 日、日曜日の午後を候補の日と考えておりますので、そんな形でお願いしたいと存じます。会場につきましては現在調整中でございますので、また決まり次第お知らせさせていただきたいと思います。

また 10 月の日程につきましても、委員の皆さまとご連絡を取りながら候補の日を絞ってまいりたいと考えておりますのでよろしくお願いいたします。

以上でございます。

（飯島委員長）

それではそんな予定でお願いします。

ありがとうございました。